

ニホンザル個体群の総合的研究

○ 川中健二 (信大・医・第二解剖)

今日のニホンザルの分布型をみると、いくつかの群れが地域的集中をなして生息しているというのが一般的である。このような分布型を示しているニホンザルの社会の構造を明らかにするためには、群れの構造だけでなく、地域的集中の構造を解明することは欠くことができない。

現在のところ、群れ間の相互関係や、群れ間を転属するオスを介しての群間関係等が、明らかにされつつあるが、地域的集中の構造は、まだ十分に解明されたとはいえない。

筆者は、この問題の解明のために、餌づけされた3つの群れが、1つの餌場を利用している高崎山と、少なくとも4つの群れが隣接している志賀高原とにおいて調査をおこなった。

高崎山では、餌場をめぐる3つの群れの相互関係や、餌場で2つの群れが出会った場合の、異なる群れの個体間の関係を調査した。その結果は、現在、先に筆者がおこなった調査結果(川中、準備中)と比較検討中である。

志賀高原では、餌づいているA群に、他から転入し、留まっている4頭のオスと、A群出身の個体との関係を中心に調査した。調査期間が短かいため、結論をだすには至っていないが、今後も調査を継続して、これらのオスの、群れの中での社会的地位の変化を追跡したいと思っている。

以上のような研究は、地域的集中の構造だけでなく、群れの構造をも、従来よりダイナミックな視点から再検討するのに寄与するであろう。

設定課題 b. ロコモーションとの関連における霊長類身性の比較形態学的研究

二、三 *Macaca* の皮膚裂線系の形態学的観察

和栗秀一 (北里大・畜産・家畜解剖)

皮膚裂線が動物の体形と密接な関連をもつことはよく知られているが、*Macaca* の所見はまだ得られていない。今回、ニホンザル Mf (雄成1, 雄若2), タイワンザル Mc (雄若1), アカゲザル Mm (雄若2, 雌若1) およびカニクイザル Mi (雄若2) の計9例につき観察した結果、次の成績が得られた。

1. *Macaca* の皮膚裂線は細部について検討すれば、個体差ならびに種間差が認められ、いわゆる *Macaca* の基本裂線を規定するのは難しい。しかし、凡その裂線

高宕山野生ニホンザルの食物に関する 栄養学的研究

○ 小池裕子 (東大・理・人類)

野生ニホンザルの食物種についてはかなり明らかになりつつあるが、個々の食物の栄養価についてはほとんど調査がなされていない。そこで、高宕山野生ニホンザルの各季節の主要食物の栄養分析を試みた。

高宕山 I-B 群の追跡調査は、夏期(7月中旬), 秋期(10月下旬), 初冬期(12月中旬), 厳冬期(2月上旬), 出産期(5月中旬)の五回にわたって行なわれ、食物の種類・被食部・頻度の観察, 食跡, 糞などが調べられた。主要食物と認められた種の被食部のみを採集し、ただちに湿重量を計量し、自然乾燥して持ち帰り分析用資料とした。分析用資料となった主要食物種は、

夏期: ヤマザクラの果実, タケノコ, コナラの若葉, アザミ・クズの茎。

秋期: ミツバアケビ・アケビの果実, クリの実, ノブドウ, コナラの実。

初冬期: クズの実, ネムノキ・クスノキの実。

厳冬期: クズの実, 各種の冬芽・樹皮。

出産期: クワ・ネム・ススキ・フジの茎および若葉。

栄養分析の方法は、水分を105°C 乾燥法, 灰分を直接灰化法, 蛋白質をケルダール法, 脂質をソックスレー抽出法で定量し, 糖質は、ヘンネベルグ・ストーマン法によって得られた繊維量を差し引き炭水化物量、から引算したものである。

分析の結果は、まだ全資料の分析をし終えず、不完全であるが、概してニホンザルは、アケビ・ノイチゴなどの糖分の多い果実を好み、またクズ・タケノコ・ムカゴ・ドングリなどの糖質の多いものを常食としている傾向がある。

系を整理すると、鼻背部には横位裂線がみられ、左右の眼部は大きく囲まれるように緊張し、また前頭部から頭頂・後頭部へと次第に縦位裂線を示し、頬部や下顎からの裂線と共に頸の裂線に移行する。鎖骨部から前胸部まではほぼ横位を示すが、腹部は縦位となる。肩甲部は外後方に向う斜位ないし弧状裂線を示すが、背部から尾にかけてはほぼ横位となる。殿部では尾根に中心をもつ不正類円状裂線を示す。尻ダコ部の裂線は肛門の放散性裂線または会陰の縦位裂線に影響され、かなりの変異を示す。体肢はほぼ肢端に向って緊張する。

2. 以上の裂線系のうち、頭部から前胸部ないし肩甲部までの裂線は *Macaca* 種間で類似性が高く、またヒ